

唐招提寺伝来霊樹寺蔵釈迦如来坐像について —奈良における平安時代中期彫刻の展開—

阿久津 武大（奈良大学）

埼玉県久喜市の霊樹寺（曹洞宗）木造釈迦如来坐像（埼玉県指定有形文化財）は、かつて近隣の鷲宮神社の別当寺院、大乘院の本尊像であった。明治初年の神仏分離政策による同寺廃絶ののち、霊樹寺二十七世高峰宦道和尚が引き取り、継承された。

鷲宮神社蔵『大乘院由緒書』により唐招提寺から伝来したとの記述があることが注目される像であり、昭和52年度に行われた埼玉県指定時の調査の際は平安彫刻の古様を伝えるとしつつ、大乘院の創建とあわせ平安時代末から鎌倉時代はじめの造像の作とし、また林宏一氏により10世紀末ごろから11世紀前半ごろ造像の作であることが示されてきた。

発表者は同像を調査する機会を得て、従来ケヤキ材とされてきた本像の用材については、目視ではあるが奈良地域において使用例を確認できるサクラ材とみられること、脚部・背面・地付部等を中心に江戸時代に大規模な修理が行われていることを確認した。

『大乘院由緒書』には、鷲宮神社は江戸初期に神主の大内氏が唯一神道の立場をとり寛文七年（1667）には大乘院の廃仏が行われていること、その後元禄年間に再興が行われ、本像が唐招提寺から護持院隆光によってもたらされたものであるとの記述がある。隆光は、唐招提寺で出家しており、元禄五年（1692）に徳川綱吉から唐招提寺の修理工料を賜っていることから、唐招提寺に影響力を有する人物であったといえる。また隆光が、奈良の他の寺院において仏像を移動し安置場所を変更した事例を確認することができ、『大乘院由緒書』に記される内容の信憑性があると考えられる。

唐招提寺の歴史を記した『招提千歳伝記』の霊像篇では、「自余霊像、其数無計。或尺迦葉師或地藏観音等古像及新刻像等、不能具載。又散在諸州諸寺、吾山之霊像非一二也。古往伽藍数十字、西山別院数十字、故殿堂院々不知其仏像之数。今在当寺及破壊像、又尤多焉。」（下線発表者）とある。これにより江戸時代唐招提寺から、諸寺に仏像が移動していたと考えられる。現在唐招提寺には、破損して脚部材のない状態の平安時代の如来坐像が2軀、平安時代に制作された体部に別の仏像の脚部材を補う如来坐像が1軀ある。これらの像は明治時代には鼓楼に伝来していたが、脚部と地付部を後補とする霊樹寺像も同様の状態で唐招提寺に伝来していた可能性は高い。

こうした検討を踏まえて、本発表では、霊樹寺蔵木造釈迦如来坐像を唐招提寺伝来像と判断し、唐招提寺の諸尊及び奈良周辺における作例との比較を行うことにより、奈良における10～11世紀の仏像様式の展開のなかに本像を位置づけ、その彫刻史的意義を検討する。